命の火

光琉

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
命の火

【Ｎコード】
Ｎ７８９６Ｉ

【作者名】
光琉

【あらすじ】
土銀です。結構シリアスな話でちょっと斬りあいのシーンなどがあります。取り敢えずハッピーエンドは絶対です！
間違いや感想ヨロシクお願いします！

一話

（何故…？何故俺は死なない？）

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

（先生…？どうして？どうして死んだの？俺のせい？俺が生きてるから悪いの？……大丈夫。先生の敵は俺達がとるから…）

その日から銀時は戦場を駆ける夜叉となった。
無表情で刀を振り、天人の屍の山を幾つも作り上げた。
敵からも味方からも
『白夜叉』
と呼ばれ恐れられ、話す相手も限られたが、銀時は復讐の為に自ら先陣を切って天人を切り捨て続けた。
（違う…。俺は復讐の為だけに切っているんじゃない…。この、俺の命の火を消すために此処にたっているんだ。…なのに…何故死ねない…？）

「うっ…あぁぁぁぁぁ！」

自分の叫びに目を覚ました銀時。

「どうしたんだ！？銀時！」

「！？…あ…と…しぃ。」

「ん？どうしたんだよ？」

土方にぎゅっと抱き着く銀時。

「…なんでもないから…お願い。抱きしめて…。」

「…分かった。」

「ありがと…」

「いや。で、どうしたんだよ？」

「怖い夢を見た…。」

「そう…か…よしよし」

いいながら自分の胸の所に抱き着いている銀時の頭を撫でてやる。

「落ち着いたか？」

「うん。ありがと。トシ。」

「気晴らしに外に行くか。」

「うん。」

（思えばこの時外に出ることを拒んでいたら…）

二話（前書き）

決して死にネタでは無いんですが、死にネタ的表現があります

二話

銀時と土方は散らばっていた服を着て外に出る。

「何処に行きたい？」

「歩こ。」

「は？」

「だから散歩したい。」

「ああ。たまにはいいかもな。」

「うん！」

にこっと笑う銀時につられて笑顔になる土方。

「お前はホントに可愛いな。」

「なっ／／／／可愛いとか、いわれても嬉しくねぇよ！」

「その割には顔が真っ赤だが？」

「なっ！意地悪…。」

ザッ。物陰から数人、刀をもった奴らが現れる。

「真選組副長土方十四郎！その命頂戴する！！！」

すると一気に襲いかかってくる。
銀時は木刀、土方は刀を振りかざし応戦する。

「うぉぉぉぉ！」
どんどん首をはねていき、最後の一人の首をはね終えた時には周りも自らも血まみれだった。「ふー。終わったか…」
「いっつもこうなの？」
「あ？…あぁ、まぁな。もう慣れた。」

「ふーん。」

そしてまた歩き始める二人
すると後ろから

「覚悟！！！」

「！！？？？」

不意打ちで切り掛かられ避けれない。

「土方！」

「（くそっ…。避けきれねェ…。）」

ギュッと目つぶり次に来る衝撃に堪えようと踏ん張る。
……が、何時までたってもその痛みがこない。そっと目を開けると、目の前で背中を斬られている銀時。

「銀…時？」

「クッ……」

その場に倒れ込む銀時を自分の腕で支え、呼びかける。

「銀時！！しっかりしろ！銀時！」

「はは…。土方泣いてる。」

「銀時っ！なんでっ！」

「…昔はあんなに死にたかったのに…なん…でだろ？今…はすっごい…死に…たくない…。ごめんね…。土方。」

「謝るなっ…。謝らないでくれよっ！銀時ぃ！」

「ご…めんね…。世界…で、一番…愛、してる。」

そして気絶する銀時。

「銀時ィィィィィ！！！！！」

二話（後書き）

ここからハッピーエンドに持ってきます。

三話

ピッピッピッ

此処は大江戸病院。

あのあと土方の絶叫に近くを見回りしていた近藤と沖田が駆け付け、病院に連絡してくれた。

幸い深い傷を負っただけで大事にはいたらなかった。しかし、いっこうに目を覚まさない。

「命に別状は無いので、後は本人次第ですね。」

とだけ言って医者はでていく。

「ゴメンっ！銀時！お願いだから目を覚ましてくれよぉ…。」

「土方さん。今日は一旦帰って明日また来やしょう。」

「そうだぞ。トシ。万事屋はいつ起きるか分からないんだから。」

「だからこそっ！…だからこそ居たいんだ。すまねぇ。近藤さんと総悟は帰っていいから…。」

近藤は少し考えた後、

「分かった。だが体には気をつけろよ。」

「あぁ。ありがとう。近藤さん。」

そして病室からでていく近藤達。

「銀時…。早く起きてくれよ…」

四話

見渡せば辺りは一面金色の野。
その中に銀時は立っていた。

「ここ…は…」

「銀時。」

名前を呼ばれ振り向くと川の向こうにかつての師、松陽先生が立っていた。

「せ…んせい。」

「大きくなったね。」

足が言うことを聞かずその場に崩れてしまう。

「ごめん…なさい。」

「何に謝っているのですか？」

「俺のせいで…。俺がっ…居たから…。」

とうとう泣きだしてしまう銀時。

「何を言っているのですか？私は私のやりたかった事をして殺されてしまっただけの事。銀時のせいではありません。」

「でもっ…」

「私は嬉しかったですよ？私の代わりに天人と戦ってくれて。」

「……」

「銀時。お前はまだこちらにきてはいけません。また時がきたら会いましょう。」

「先生！」

突然天から声が聞こえる。

『銀ちゃん！』

『銀さん！』

「！…神楽…新八…」

『万事屋！目を覚ませ！』

『旦那ァ。起きてくだせェ。』

「ゴリラ…沖田君…」

『銀時…お願いだ…起きてくれ…。』

「…トシぃ…フェ…うぇぇ…」

土方の声で緊張がとけ、ボロボロと音がするように泣きだしてしまう。

「ほら。まだ向こうには銀時を必要としてる人たちが沢山います。早く戻ってあげなさい。」

「はい。ありがとうございました…。」

すると、次第に体が透けてくる。

「さようなら。銀時。」

そしてそのまま消えてしまう。

「幸せに…なれたようですね。銀時…。」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7896i/

命の火

2010年10月13日20時50分発行